

新規治療効果判定法の確立と腫瘍物性を対象とした研究

国立がん研究センター先端医療開発センター 臨床腫瘍病理分野

概要

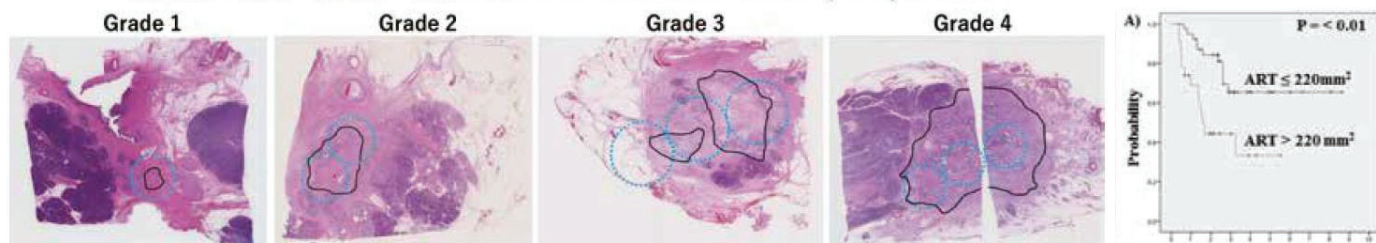
- ▶ 新しい病理学的治療効果判定法の提案を行っています
- ▶ "がんはどうして硬いのか?"を実際のヒト組織を用いて研究し、腫瘍の硬さに応じた遺伝子発現解析を検討しています

研究背景

医薬品の治療効果は、医薬品投与前後における腫瘍の大きさの変化量で判定されていますが、判定には薬投与開始から長期間の追跡調査が必要となっています。また、腫瘍には様々な硬さがあり、硬さと乳がんの術後リンパ浮腫との相関が報告されているものの、硬さを定量的に計測する技術や硬さに応じた遺伝子発現変動などはあまりわかっていません。当分野では、手術で摘出した膵臓がん検体の残存腫瘍領域 (Area of Residual Tumor : ART) が予後を規定することを見出しました。また、腫瘍の硬さを定量する装置の開発や腫瘍の硬軟に応じた遺伝子発現変動の解析も実施しました。

臓器横断的な病理組織学的治療効果判定方法

顕微鏡の視野 (青枠) を用いた Area of residual tumor (ART) Grade



Kojima, et al. Pathol Int 2009. Sakuyama, Kojima, et al. Cancer Sci 2018. Okubo, Kojima Sci Rep. 2019.

ヒト組織検体を用いたがんの硬さの検討

がんの硬さは線維化等間質に影響され、硬いがんの遺伝子発現からバイオマーカーが多数発見されています

